

# 在日朝鮮人作家・金達寿と「解放」 —— 日本語雑誌『民主朝鮮』を中心に ——

関 東暉

## 1. はじめに

1945年8月15日、36年間続いた日本の植民地時代は幕を下ろし、朝鮮（人）は解放を迎えた。だがその後、独立するはずの「祖国」朝鮮は米ソによる分断占領を経て、1948年に南と北に分かれて不完全なまま独立した。そして続く朝鮮戦争（1950-53年）により、東西冷戦の国際的環境のなかで南北国家の対立と民族の矛盾が深められていった。

こうして、8月15日以降すぐに「解放＝祖国の独立」が達成できない状況のなかで、日本帝国から解き放たれた多くの朝鮮人は、「解放」を完全なるものにするため、改めてその意味を咀嚼し消化することが求められた。

解放後にはじまる「真の解放」をつかみとるための様々な営みは、戦後日本という時空間を生きる在日朝鮮人<sup>(1)</sup>にとっても決して欠かすことのできない課題であった。「解放」とはいかなるものなのか。どうすれば「解放」にたどり着けるのだろうか。本稿は、このような問いに悩みもがく在日朝鮮人作家・金達寿<sup>キムダルス</sup>（1920-97年）に注目する。

金達寿<sup>(2)</sup>は、解放後（＝戦後）<sup>(3)</sup>に日本語で創作活動をした在日朝鮮人文学者の嚆矢として知られる。戦後本格的に活動する在日朝鮮人作家の代表として取り上げられてきた金に関しては、従来いわゆる「作品論」や「作家論」研究が多く蓄積されてきた<sup>(4)</sup>。だが、彼がどのように「解放」を捉えていたのか、そしてそれが「作家」としての金達寿とその「作品」にどのように影響したのかといった、彼の思想についてはあまり注目されてこなかった。そこには、この時期の在日朝鮮人文化人・知識人が「解放」の喜びと共にひたむきに民族文化の創造に励んでいたという、揺るがしがたい「解放」そのもののイメージが存在し、そのことが彼の思想に関するそれ以上の追求を阻んでいたかのように思われる。

しかし、そうした「解放」の捉え方からは、金が解放直後について、「戦後となったが、（中略）しかしやがてすぐにそれは「解放・独立」とカギがつくようなものとなった」<sup>(5)</sup>と言ったことの意味を理解するのは困難である。また後述するように、金の生涯にわたる活動を理解するためには、その基盤が形作られる1940年辺りから解放直後にかけての期間に着目することもまた有意義であると考えられる。

彼が言うように、長い間多くの朝鮮人は「解放」を念願しつづけてきたのだが、解放されたからと言って、それがすぐに何かの「形」として現れたわけではなかった。高揚かつ混乱していた解放後に、その「形」を想像／創造するのが当面の課題であり、それは様々な葛藤を伴う営為でもあったのだ。

そしてそのような状況下で、新たな「解放」の形を刻むべく構想の場として設けられたのが、解放直後に金が没頭していた雑誌『民主朝鮮』<sup>6)</sup> (1946年4月-1950年7月)である。

本稿では、金達寿が「解放」をどのように意識していたのか、そしてそれが敗戦直後の日本における彼の活動にどう影響したのかについて、雑誌『民主朝鮮』を手がかりに考察していきたい。

## 2. 金達寿の植民地経験

在日朝鮮人作家・金達寿は、解放前にも作品を書いていたがあまり注目されなかったという点で「戦後派知識人」だと言える。戦前期の、いわゆる「革命家」ではなかったということは、彼自身が確固たる思想を持って解放を迎えたわけではないことを意味する。だとすれば、彼の戦後における活動やそのなかに現れる思想は、解放前、つまり植民地時代の生活や経験からモチーフを得たものだと考えることができるだろう。はたして金達寿はどのような「経験」を戦後日本に持ち越したのだろうか。

ここでは雑誌『民主朝鮮』の創刊から3年間編集長を務め、戦後派在日朝鮮人文化人の代表格とも言える金の植民地経験を取り上げる。これは、彼が解放後に深く関わってゆく『民主朝鮮』を理解する上でも欠かせない作業である。

10歳の時に日本内地へ渡った金は、工場で働いたり、古物商を手伝ったりして家計を助けながら、1939年9月に日本大学芸術科に入学する。生活に苦しみながら勉学に励むというのは、当時の在日朝鮮人にしてみればそれほど珍しいことではなかった。金が自分のことを「ブルジョア」ではなかったと言っているように<sup>7)</sup>、それは一般の在日朝鮮人大衆が経験したことであった。その意味で、植民地時代における彼の創作活動が在日朝鮮人大衆の生活を描くことから始まったのは自然であり、それはプロレタリア文学における「人民」の描写ともまた区別すべきものであった<sup>8)</sup>。

金は、1940年に最初の小説「位置」を日本大学芸術科の学生による同人誌『芸術科』の8月号に発表した。処女作である「位置」は、崔孝先の言葉を借りれば、「題名と内容、名実ともに在日朝鮮人の日本における位置意識」を確認するものであった<sup>9)</sup>。金にとって「位置」は、彼の生活そのものを描写した作品だったのである。

小説「位置」は、日本内地で成長した朝鮮人と日本人との関係のなかで生まれる民族差別を描いているが、金はこの時期から自己の民族性を意識しはじめたと思われる。そしてそのような意識は、「位置」を発表した20歳のときにさらに強まった。1940年の夏休みに一時帰郷し、そのまま京城まで足を伸ばした彼は、そのときのことを、「はじめておとずれたこのときのソウルの印象は、いまなお私の脳裡に強く焼きつけられた」と回想している。彼自身がそこで「はじめて、自分の祖国と民族とを発見した」のである<sup>10)</sup>。

日本人による民族差別に触発されて目覚めた民族的アイデンティティは、朝鮮を訪れた

ことではっきりと「発見」された。しかし、それは同時に、一人の在日朝鮮人青年が自身自身の「半日本人」性に目覚めた瞬間でもあった<sup>(11)</sup>。矛盾に満ちた「自己＝民族」を直視する姿勢は、解放前に書き始めて解放後に完成する小説「後裔の街」の主人公・高昌倫<sup>コチャンリン</sup>に投影されている（第6節で詳述）。

このように、彼は作品を通して差別を受ける最下層民衆としての「民族」（日本人によって可視化される人間集団）、そして半日本人である「自己」（日本帝国主義がもたらしたもの）から目をそらさなかったが、この歪んだ民族意識は戦後における彼の文化活動にも反映されていった。

さらに、解放後につながる金達寿の創作活動に、この時期多大な影響を与えた人物として注目しなければならないのが、解放前における在日朝鮮人作家の先駆的存在である金史良<sup>キムサリヤン</sup>（1914-50年）だ<sup>(12)</sup>。小説「光の中に」が芥川賞候補となり、すでに日本文壇で関心を集めていた金史良と金達寿が知り合うのは1941年秋である。二人は約半年間という短い間ではあったが、親交を深めていった。この間、金史良から金達寿宛に送られたはがきには、「兄（金達寿＝引用者注）こそ、あの生活感情、ひいてはわれらの生活感情を立派な小説にして書いて下さい。あなたにはそれが書けます」<sup>(13)</sup>と書かれているが、このように金史良から励まされまた託された金達寿は、在日朝鮮人の生活を書くことにさらなる意味や価値を見出していたのである。

しかし、周知の通り、戦前期における「民族」への希求が束ねられて政治的な力を発揮することはなかった。1941年末期に始まる太平洋戦争により、行政当局主導の監視体制がますます強化され、在日朝鮮人が自主的に何かを訴えかけたり、それを広めたりすることはできなかったのである。その思いが噴出するのは1945年8月15日以降になるのだが、それは「外」から訪れた解放によるものであった。そうした状況のなかで、戦後日本において「真の解放」のために民族文化の創造を任されたのが金達寿をはじめとする戦後派文化人であり、その一つの実践として刊行されたのが、日本語雑誌『民主朝鮮』であった。

### 3. 雑誌『民主朝鮮』の創刊に込めた夢

#### (1) 雑誌『民主朝鮮』が創刊されるまで

解放翌年の1946年初頭、新しく組織された在日本朝鮮人連盟<sup>(14)</sup>（以下、朝連）の神奈川県本部と横須賀支部で常任委員を兼ねていた金達寿は、突然ある日、当時同じく神奈川県本部の常任委員を務めていた元容徳<sup>(15)</sup>にある一つの提案をする。その内容とはこういうものであった。「朝鮮と朝鮮人に対する日本人の誤った認識を正すための雑誌をだしたいと思うがどうだ」<sup>(16)</sup>。突然の思いつきではあったが、それは前節で言及したような彼の植民地経験のなかですでに用意されていたことであった<sup>(17)</sup>。

雑誌を発行するに際して資金を出してくれた趙進勇<sup>チョジンヨン</sup>を社長とし、事務所は朝連の横須賀

支部、雑誌名は『朝鮮人』にしようとした<sup>(18)</sup>。印刷所を探すのが困難であった焼け野原の時代に、新しく迎えたメンバー<sup>キムウオンギ</sup>金元基の紹介でようやく印刷所が見つかる<sup>(19)</sup>、雑誌の宣伝をするようになり、そこで当時朝連神奈川県本部の委員長をしていた<sup>ハンドクス</sup>韓徳銖（1907-2001年）<sup>(20)</sup>が、「雑誌の名は『朝鮮人』だそうだが、それでもいいけれども、どうだろう。われわれはこれから民主主義朝鮮を建設するのだから、その誌名も『民主朝鮮』としては」と提案したことから『民主朝鮮』という名がつけられた<sup>(21)</sup>。

こうして後に、戦後日本における在日朝鮮人の有力メディアとして評価される雑誌『民主朝鮮』が誕生した<sup>(22)</sup>。

## (2) 雑誌『民主朝鮮』がめざしたもの

社長=趙進勇、総務部長=<sup>チャンドウシク</sup>張斗植、業務部長=金元基、主幹=元容徳、編集長=金達寿、以上のメンバーでスタートした雑誌『民主朝鮮』は、その後、朝鮮戦争が勃発するまで続いた（1950年7月の第33号をもって終刊）。敗戦直後に5年間も刊行し続け、しかもそれが在日朝鮮人による雑誌であったということは、当時にしては非常に画期的だったと言えるが、はたして雑誌『民主朝鮮』は誰に向かって何を伝えようとしていたのだろうか。

まず、「創刊の辞」の一部をみてもらいたい。

我等の進むべき道を世界に表明すると同時に、過去三六年という永い時間を以て歪められた朝鮮の歴史、文化、伝統等に対する日本人の認識を正し、これより展開されようとする政治、経済社会の建設に対する我等の構想をこの小冊子によって、朝鮮人を理解せんとする江湖の諸賢にその資料として提供しようとするものである。<sup>(23)</sup>

雑誌『民主朝鮮』は金達寿が構想段階で抱いていた「日本人の認識を正」すことをめざし、日本人を対象として創刊された。もちろん、当時『民主朝鮮』の主筆でもあった<sup>イウンジク</sup>李殷直（1917年生）<sup>(24)</sup>が、「日本の反動政治の犠牲により全人口の七割以上が文盲であるべく強制された」<sup>(25)</sup>と述べていたように、若い<sup>イウンジク</sup>在日朝鮮人を中心に日本語を主な生活用語とする人が多かったことから、朝鮮語がわからない、あるいはそれに近い在日朝鮮人が祖国朝鮮について勉強する際にも『民主朝鮮』が用いられていた<sup>(26)</sup>。しかしこの雑誌が日本人を主な対象としていたことは、創刊当時もその後も、終始変わらなかった<sup>(27)</sup>。

創刊当時、『民主朝鮮』に対する反響は大きかったが、日本の進歩的な左派系知識人である細川嘉六（1888-1962年）<sup>(28)</sup>が戦後、監獄から出て来て最初に『民主朝鮮』を買ったというエピソードからもそのことが窺える<sup>(29)</sup>。

さらに、『民主朝鮮』は日本人と共につくっていく雑誌でもあった。執筆者の構成をみると、全体の53%が在日朝鮮人であり、18%が朝鮮半島にいる朝鮮人、そして25%が日本人であった<sup>(30)</sup>。長い間編集長を務めていた金達寿も、この雑誌の性格を「朝鮮人が経営し、

朝鮮人が編輯する雑誌」であるが、「むしろこれは日本人を中心にした雑誌である」<sup>(31)</sup>と明記していた。

では、雑誌『民主朝鮮』を通して金達寿は何を伝えようとしたのか。解放後にここまで「日本人」にこだわっていたのはなぜだろうか。創刊号の「編集後記」にそのヒントとなる文章が記されている。

東京においてはすでに朝鮮の活字を鑄造することも出来、朝鮮民衆新聞その他が発行されているが、呪われた運命の下に修得されたとはいえ、日本語をこのように駆使したこのような雑誌が一つ二つ存在することもわれわれ朝鮮人にとって、また日本人にとっても是非必要なことであると信じている。そして日本人もまた将来われわれの祖国において、朝鮮語によるこのような雑誌を発刊することを希望するものである。それがまた自由と解放というものではないか。<sup>(32)</sup>

雑誌『民主朝鮮』は、日本語によって日本人に訴えようとするものであったが、そのときに使用される「日本語」は自由に選択したというより、むしろ「呪われた運命」によって選ばれたものだと言っている。金達寿は述べている。「呪われた運命」を逆手にとって、解放後に日本語を日本人に向けてとき、どんな声が発せられるのだろうか。

金達寿の『民主朝鮮』に込めた夢が、彼の積み重なった植民地経験に端を発するものだとするならば、彼にとって負の歴史の遺産である日本語をもって表現することの意味は、日本人との関係によって歪められた「民族的自己像」を払拭することにあっただろう。そしてそれが達成できたときに「日本人もまた将来われわれの祖国において」、しかも「朝鮮語による」創作も可能になり、日本人との新たな関係性の構築という「解放」・「自由」が訪れると考えられたのである<sup>(33)</sup>。

#### 4. 「文学用語論争」にみる金達寿の「解放」をめぐる意識

解放後、朝鮮への帰国が盛んに行われるなか、日本に留まった、あるいは一度帰国したものの再び日本に渡航して来た人々のあいだには、その理由を「朝鮮語を話せないから」と述べる人が多数存在していた<sup>(34)</sup>。若い在日朝鮮人の多くは日本語で思考し、日本語を用いて表現する。だがそのような日本語を憎まなければならない状況に置かれていたのである。

そんななか、在日朝鮮人文学者たちの間では日本語と日本語による文学創作をめぐる議論が先鋭化していた。いわゆる「文学用語論争」である。この論争は「日本語で書くこと」をめぐる主として金達寿と魚塘<sup>オダン</sup>(1919-2006年)<sup>(35)</sup>の間で行われた議論を指す。

従来の研究では、文学用語論争は時代的制約のもとで発展的に展開されず「不発」で終

わったと指摘されて来たが<sup>(36)</sup>、ここでは金達寿が「日本語で書くこと」に内在していた「解放」の問題をどう捉えていたのかに焦点を当ててみたい。

朝鮮語を取り戻す<sup>(36)</sup>在日朝鮮人の活動は、敗戦直後から行われた。1945年9月には神田朝鮮YMCAで国語講習会がはじめられ、10月に戸塚ハンゲル学院などがつくられた<sup>(37)</sup>。このような取り組みは、朝連第2回臨時大会(1946年2月)の「教育・文化啓蒙運動の拡大強化」という方針が打ち出されてから組織的な課題となってゆき、1947年1月には全国に初等525校、中等4校、青年学校10校の民族学校が建設されるなどの形で推進された<sup>(38)</sup>。

こうした状況のなか、朝連が掲げる朝鮮語による「文化啓蒙運動」と日本語で書く雑誌『民主朝鮮』の試みとの間に軋轢が生じ、その延長線上で「文学用語論争」が引き起こされたと考えられる。1947年から在日朝鮮人文学者の間で用語問題が顕在化した<sup>(39)</sup>、翌年の1948年4月になると、『民主朝鮮』の姉妹雑誌として刊行されていた文芸誌『朝鮮文藝』<sup>(40)</sup>において「特集 用語問題について」が組まれるほどであった。そのなかに金達寿と魚塘の論稿がそれぞれ紹介されているが、まずは両者の主な主張をまとめて紹介しておく。

魚塘は「日本語による朝鮮文学に就て」のなかで次のように述べている。

文学が言語芸術である以上、その民族の文学はその民族語に從属すべきであると云うことは、常識であるからだ。<sup>(マ)</sup>言換すると朝鮮語なしに朝鮮文学は、なりたないからである。(中略)現に朝鮮文学であると、日本語による文芸運動が展開されているが、再三云う迄もなく朝鮮文学の一つの畸形であって、先に例をとったように、日本文学の一ジャンルであろう。これら文芸誌も又朝鮮作家の日本文壇への登用門に過ぎず、朝鮮文学運動の一助とも半助ともならないのである。<sup>(41)</sup>

これに対して金達寿は、「一つの可能性」と題した論稿のなかで、「用語問題」を次のように捉えていた。

日本語で書かれる朝鮮文学、それはただしいわが朝鮮文学ということはできぬ。それは畸形的な朝鮮文学である。(中略)そこで日本語で書かれる朝鮮文学であるが、問題は、それが不幸きわまる原因からではあったにしろ、過去にも、そして現在でもなおこの日本に「朝鮮人とその生活」があるということ、つまりいまわれわれがこの日本に留っているということと、「日本語で書かれる朝鮮文学」という設問そのものにある。(中略)たとえばそのもろもろのたたかひの場において日本人に向ってはまだ日本語をつかわなければならぬ現実に(つまり日本に)ありながら、ただ単に日本語を嫌悪してみせることでそのドレイ的境遇＝泥沼から解放されたと錯覚している朝鮮人があるとすれば、これは大きな誤りである。<sup>(42)</sup>

この論争を取り上げてきた先行研究では、論争が「不発」で終わった理由を「日本語で書かれた作品が朝鮮文学か日本文学かのいずれに属するかという点に焦点が絞られたため」<sup>(43)</sup>だと説明されてきた。「日本語で書くこと」をどう捉えるかをめぐっては、この後「論争」の形で現れることはなかった。そのため議論が深められず、確かに論争は「不発」で終わったが、しかしこの論争をそのまま「日本文学か朝鮮文学か」をめぐる議論だったと片づけることにはまだ留保が必要である。

というのも、魚塘が「畸形文学」は朝鮮語で書かれたものでないため朝鮮文学ではないと主張したのに対して、金達寿は一度それを認めた上で、それでもなお、「畸形文学」に可能性を見いだせるかどうかという「可能性」の問題を問うている。金達寿は、この問題を通して「文学」だけを論じているわけではなく、「畸形的な朝鮮文学は可能かどうか」を問い直すことで、「ただ単に日本語を嫌悪してみせること」、つまり在日朝鮮人の「日本語」に対する姿勢を議論の俎上に載せようとしたのである。

だとすれば、金達寿にとって「日本語で書くこと」はどんな可能性を持っていたのだろうか。それは『民主朝鮮』がめざしていたことと一致している。つまり、日本人に向かって発信することによって日本の民主化や日本人との連携をめざす、日本人との新たな関係の構築という可能性である。

上で引用した「一つの可能性」の最後に、金が「畸形文学」を「日本民主主義文学の一翼でありながら、朝鮮民族文学の一環としての可能性にまで高められなくてはならぬ」と言っているのは、「日本文学か、朝鮮文学か」ではなく、そのどちらでもない、しかしそのどちらも持ち合わせる「畸形文学」ならではの可能性を提示しようとしていたことを窺わせる。

『民主朝鮮』にも、金が日本語創作の「可能性」を訴える場面がたびたび登場する。たとえば「文学用語論争」が始まったとされる1947年6月には、金が『民主朝鮮』の「編集部から」のなかで、当時日本の著名な文芸評論家である伊藤整(1905-69年)や岩上順一(1907-58年)とのあいだで交わした、「日本語でかきおろされる朝鮮文学」の意義をめぐる会話についてふれている。そこで金は、伊藤が「朝鮮文学それ自体も日本語でこのように提出されることによって期待すべきある可能性をもつことはもちろん、日本文学にも新しい可能性を与える」として、日本語で書くことが両文学において可能性を示し得ると語ったことを紹介しているが、その可能性とは、岩上の言う「日本との民主的提携、文学的提携」であると述べていた<sup>(44)</sup>。

もちろん、伊藤や岩上の「日本語でかきおろされる朝鮮文学」への評価が、在日朝鮮人の「日本語」をめぐる苦悶をどれほど理解したものなのかはやや疑わしい<sup>(45)</sup>。しかしそれを見抜いていたかのように、彼らの評価について金は、「私たちは日本語で創作をして朝鮮を理解してもらって役割をはたしながら、私たちの国語でももちろんかくつもりである」と断った後、「日本語」にこだわるのが決して「文学」だけを問題にするのではなく、そ

れによって「日本人との連携」が達成できると考えているからだと記している<sup>(46)</sup>。

さらに金は、『民主朝鮮』第12号(1947年7月)の「小説特集」の編集を終えた後、「日本語」への思いを次のように示している。

日本語による朝鮮文学がこのように成長してゆくということは、いったい何を予想させるか。それはわが朝鮮文学にとってプラスであるか？われわれはマイナスであるとは感ずることは出来ない。もちろんわが朝鮮文学にとっては、これは畸形的な存在であろう。しかしこれはまた畸形的に存在することによって、「朝鮮文学の豊富な可能性」であるとわれわれは考える。過去においてそれが不幸なシンボルでさえあったおしつけられた言語を逆手にとった可能性の成立これは充分意義があつていいことだと思ふ。<sup>(47)</sup>

魚塘が朝鮮語によってのみ新しい祖国のための運動が可能になると捉えていたのに対し、金は日本帝国によっておしつけられた「日本語」の可能性を模索していた<sup>(48)</sup>。それは、解放前に日本語で作品を多数発表していた張赫宙(野口赫宙<sup>カクチュウ</sup>, 1905-97)が「日本語」に対して「道具主義」的な考えを持っていたのとは異なる<sup>(49)</sup>。上で引用した「一つの可能性」のなかで「八・十五以後の解放を契期としてにわかには朝鮮人がふえた」と言ったことから想像できるように、金達寿はむしろ、解放後にすぐ日本語を憎むことが「解放」の証しであるかのように行動する人々の「軽さ」をみつめることから、帝国主義の遺産を「逆手にとった」可能性、言い換えると、「あらゆる問題のもととしてその底に横たわっている過去の境遇を清算して、そこから実質的に解放される」という可能性をつかみとろうとしていたのであった。文学用語論争はそうした文脈のなかで捉えなおすことが必要である。

## 5. 自己批判を通してめざす「第二の解放」

文学用語論争は、もちろん祖国朝鮮においては「論外」であった。魚塘の主張は、当時朝鮮半島で活動する知識人たちの「民族文学論」<sup>(50)</sup>の影響を受けたものだと考えられる。それと比べると、金達寿は戦後日本で日本語を用いて書くこと、つまり日本に留まることになった在日朝鮮人の問題を強く意識していた。

1945年8月15日に訪れた解放、そして戦後日本においてそれを完全なるものにしようとする悩みもが文化人たちの思想を、金達寿という一人の在日朝鮮人作家が体現していたのである。そして「解放」のためにもっと徹底的な自己批判の姿勢が必要であると考えられたのだが、自己批判を進めれば進むほど、金は日本語を軽々と捨て去るのではなく、帝国主義の遺産である「日本語」にこだわらざるを得なくなった。

文学用語論争が活発に行われていた1947年頃、金達寿が「解放」をつかみとるために自



己批判を唱えていたことは、『民主朝鮮』誌上における彼の文章からも窺い知ることができる。金達寿のエッセイ「傷跡の追求」は、流行として過ぎ去った植民地時代を表わす「三十六年」という言葉を噛みしめなければならないと訴えているが、それは植民地経験が残した「傷跡」をどこまでも追求することによって「真の解放」を求めなければならないということを示唆していた。

解放後、われわれがもっともおおくもちい、多くきいてきたことばに「過去三十六年…云々」ということばがある。(中略) このことばは解放を契期としてわれわれを顧み、そして展望する上においてのわれわれのあらゆる発想につながることばであった。それで何かの集会といえ「三十六年か」というほどになり、ちかごろでは「もう三十六年をさぐることはいい加減にしようじゃないか」という「ことば」も出てあまりきかぬようになった。ことばの流行であったのである。しかし私は解放から二年をおくったちかごろになってはじめてこのことばとその意味を痛切に感じるようになったのである。解放の気負い立った季節がすぎ去って、ふつうの季節のなかにおかれて落ち着きを取り戻してみると、われわれはあまりにもおおくのことを露呈しすぎている。

(中略) われわれの祖国が暴圧と搾取の機構によって徹底的に荒らされたことと同じく、荒らされ歪められたわれわれの、いや私の精神・性格風景をながめて私は愴然とした気持ちに打たれずにはいられない。(中略) われわれは「私」のこの性格を解放の拍車をもって打ち消してはならない。われわれはまだ汚辱に充ちた「三十六年」からは決して解放されてはいないのだ。この傷跡をじいっとみつめ、これを追求し、てっ抉することによってはじめてわれわれは解放されるだろう。<sup>(51)</sup>

このような金達寿の「解放」に向かうための自己批判意識は、1948年頃になるとさらに強まっていた。金をはじめ、『民主朝鮮』で執筆活動をしていた在日朝鮮人文化人たちは、創刊2周年を記念して「われらの放談」という座談会を行っている<sup>(52)</sup>。この座談会では金達寿が最初に「我々は何をかくべきか」と問い、その後『民主朝鮮』に掲載された朴元俊<sup>(53)</sup>の小説「金嬢のこと」<sup>(54)</sup>に話題が移っていった。皇国少女の従軍看護婦であった主人公が解放後に苦しい自己批判を繰り返しながら民族的自己を取り戻していくこの小説を、金達寿は、当時の文化人たちが当面している「我々の民族の新しいタイプを作る」問題に「ふさわしい試みを提出し得た」と高く評価していた。解放後の「民族の新しいタイプ」とは何であったのか。座談会の一部を引用しておく。

許南麒<sup>(55)</sup> 一足飛びに地上から雲の上に立ったようなものではなく、ああいっつ一つ階段を踏んで行くように消化して行かなければならない。

金達寿 そうだ。あのなかにはこんな問題が出てくる。八・十五以降、我々は一斉に

四字から三字に名前を切替えた。それで我々はすましている。というよりも気がするといい方がいいかもしれないが（後略）。

**朴元俊** それは僕はこうだと思う。今ここで過程という問題が出たけれども、これをわれわれは考えなければいけないと思う。つまりあの中にも一寸触れたように、朝鮮人が四字の名前を三字に変えたということ、…なぜ変えたかという、日本において我々が生活する場合に生活の方便として意識的にやったんだ。（中略）だから四字の名前を三字に変えるのに何等苦勞をすることはなかったんだ。問題はそこから誕生すると思う。それで文学、名前を三字に変えること、このプロセスは簡単にスムーズに行った。ところが過去の生活を完全に我々はここで消化し切ってそうして変えたかというそうじゃない。そこにこの作品の出発がある。金嬢の女の子が、これは御園文子として、日本人である資格をもって日本に帰って来た、間もなく御園文子と訣別して金珠得に還った。還ってから悩み出した。僕はここに中心を置いた訳だけれども、急に切替えて余りにも易々諾々とやったために過去に対する本当の自己清算、日本帝国の残滓がしきれなかったが、その衣を替えた訳だ。

**金達寿** 清算すること、我々の問題の大部分はそこにある。（中略） どうして三年くらい経たなければ出てこなかったのだろうか。

**李殷直** 例えば解放直後はみんなが非常に興奮しているだろう。ところが三年目になって現実を見ているんだ。そういう時に非常に自己矛盾に陥るんだ。（中略） 実際に解放されるということは自分自身が解放されないことには建設はなんにもない訳だ。ところが解放されているくせに自分から解放されていない。ちっとも自分の過去のものも清算していないんだ。それで解放されたと言って喜んでる。だからそういうものを見る時にそらぞらしさを感じる。

座談会では1945年8月15日の解放から3年という歳月が経ってはじめて、「解放」されていない自己矛盾を感じたと述べられている。詩人許南麒が引用文の冒頭で言及しているように、丁寧かつ徹底的に行うべき自己清算（自己批判）の重要性が、在日朝鮮人文化人たちの間で課題として提示されていたのである。座談会では解放後の「名前」の変化が決して「解放」と同義でないことに主眼が置かれていたが、「文学用語論争」における「日本語」も、金達寿にとっては同じく真の解放のために「自己批判」の必要性を喚起させてくれるものとして捉えられていたのだろう。

このようにして行われる自己批判の過程を、朴元俊は座談会のなかで「第二の解放」と名付けていたが、それは単なる「自己批判」で終わるものではない。朴元俊が強調したように、祖国独立のための「政治的の意味」がそこにはあったが、しかし、だからといって「第二の解放」が政治的な課題に従属するわけではなく、むしろそれは「それ以上のもの」、すなわち政治的な課題を遂行するためには必要不可欠なことだった。そしてそうした意味

において、1945年8月15日の解放を「第一の解放」、これから自己批判と共に行われる「解放」を「第二の解放」(＝解放の反省期)と位置づけていたのである<sup>(56)</sup>。

## 6. 実践としての小説「後裔の街」

金達寿をはじめとする在日朝鮮人文化人たちの「自己批判」は、当時の在日朝鮮人社会に向けられたものであると同時に、金が上の座談会で「何をかくべきか」と問い、「我々が把握しないことには我々の文学も何も出て来ない」と問いかけたように、文学者の創作における「自己批判」をも意味していた<sup>(57)</sup>。では、これらの課題を文学者はどのように実践していたのか。この時期に書かれた金の代表的な長編小説「後裔の街」を取り上げて検討したい。

『民主朝鮮』を通して紹介された日本語による文学作品は、後に「在日朝鮮人文学」と言われるジャンルの、言わば最初の段階として位置づけられてきた<sup>(58)</sup>。だが、もちろんこの時期には「在日朝鮮人文学」という言葉もなければ、「文学用語論争」でもみたように、彼らの作品は「朝鮮文学」であることを前提としたものであった<sup>(59)</sup>。

金の小説「後裔の街」もまた、「在日」朝鮮文学として『民主朝鮮』創刊号から計10回にわたって連載された。この作品は、植民地支配下の京城を舞台にして、(ほぼ)日本語しか知らない悩める朝鮮人インテリである高昌倫が「民族」に目覚めていく過程を精緻に描いている<sup>(60)</sup>。

「後裔の街」はこれまで様々な評価がなされてきたが、当時、日本民主主義文化連盟<sup>(61)</sup>の事務局長を務めていた松本正雄(1901-76年)<sup>(62)</sup>が『民主朝鮮』にその評論を寄せている。まずは松本も引用した「後裔の街」の最後の部分をみてみよう。

(前略) 昌倫は歩きだした。一步々々歩き出すごとに昌倫は足下から不思議な希望が湧き立ってくるのをおぼえた。彼は明るくなった。ほとんど笑い出したいほどに心の軽くなった。<sup>(ママ)</sup>「おーい、みんなしっかりやれよ。」と叫びたい衝動に馳<sup>(ママ)</sup>られた。俺にもやはり一つくらいの役割はあったのだ。李駿、崔啓友、それから誰が出るか分からぬ。しかし、俺は知らぬ、知らぬのだ。今度こそ俺は完全な運命の展開にみちびかされている。昌倫はちょっと立ち止まった。すると二人の刑事は同時に背を小突いた。ほら、こういうぐあい。——昌倫は晴れた空を見上げて腹の中でこっと笑った。<sup>(63)</sup>

主人公の昌倫が日本人刑事に捕まる上の場面を引いた後、松本は次のように「後裔の街」を評した。

ここではたしかに暗い追憶が明るい民族の未来につながっているのだ。私たち日本

人民の暗い追憶もまたこのように明るい民族の未来につながる必要がある。<sup>(64)</sup>

「半日本人」になっていた昌倫は、朝鮮に帰ったことを契機にだんだんと「民族」に目覚めてゆく。そして小説は、そんな彼が「抵抗」を決心したところで刑事に捕まってしまうことで結末を迎えた。このように、昌倫は実質的に抵抗できなかったわけであるが、「抵抗」の証拠とも言える「刑事に捕まる」という行為をなし得たとき、彼は「腹の中でにこっと」笑ったのである。この場面が、松本にとっては民族的「抵抗」のはじまりとして認識された。そしてそれがゆえに、「暗い追憶」が「明るい民族の未来」につながる瞬間として理解され、彼はそこに日本人として参照すべき「民族」のモデルを見つけ出そうとしていたのである。

しかし、このような松本の「後裔の街」に対する読みが、当時の在日朝鮮人文化人たちの「自己批判」の問題を視野に入れていたのかについてはやはり疑問が残る。腹の底で「にこっと」笑うことでしか「抵抗」できない、あるいは帝国の暴力装置である「刑事」に捕まるという、抑圧的他者を通してしか民族的アイデンティティの回復を試みることができない「半日本人」の矛盾を、「明るい民族の未来」のはじまりとして昇華することで、当時の在日朝鮮人の内面的葛藤は見えなくなってしまう。

「後裔の街」は戦時中に書き始められ、戦後 1947 年 5 月になって完成するのだが、金は解放後の時空において、解放前の抵抗できなかった消極的な朝鮮人インテリを描くことにどんな意味を付与しようとしていたのだろうか。金の植民地経験を考慮すると、彼が自分自身を含む「一般大衆」を、抵抗に対する「消極さ」でしか表すことができないと捉えたのではないか。

実際に 8 月 15 日の解放は「外」から訪れたのであり、太平洋戦争中、金は統治当局の御用新聞であった京城日報社や神奈川新聞社で働いた経験もある。そしてこのときの経験は、小説「後裔の街」をはじめ、その後の彼の創作活動に大きな影響をおよぼすことになった<sup>(65)</sup>。金は、言わば革命家のように「血を流していない」し、それが意識的であれ無意識的であれ、「何も知らなかった」、あるいは「抵抗できなかった」経験しか持ち得ない「戦後派文化人」であった<sup>(66)</sup>。その意味で、帝国主義の清算によって得られる「解放」のために、彼はそうした自分自身を含む多くの消極的な植民地経験しか持たない人々に目を向けなければならなかったと考えられる。また、金のこのような内面的自己批判は、当時朝鮮でも日本でも、民主主義民族文学を掲げて活動していた多くの文化人たちが、人民の生活を基盤とする文学の創造をめざしていたことにも通底していた<sup>(67)</sup>。

さらに、『民主朝鮮』の復刻版で「解説」を書いている徐龍哲<sup>ソヨンチョル</sup>は、金の小説「後裔の街」が「自己批判」に欠けていると、次のように批判している。

(前略) 高昌倫という人物の姿を、従妹の英梨との恋愛関係を織り交ぜて描くことに、

また最後に刑事に逮捕されることで初めて「足下から不思議な希望が湧き立ってくるのをおぼえた。彼は明るくなった。ほとんど笑い出したいほどに心の軽くなったのを知った」男を描くことに、どれほどの意味があったのであろうか。それは植民地支配に対して抵抗しなかった、あるいはできなかったインテリの免罪、あるいは自己肯定の形象化のように見えてならない。(中略) 苦悩する姿を描くことだけでは、自己批判とはなりえない。自己批判の欠如、あるいは未熟や貧弱さは、実は自己弁護、自己擁護にたやすく連結する危険を内包している。時代的制約とえばそれまでだが、いやむしろそういう時代だからこそ、時代を先取りするインテリは、あるいは人間の真実を描くことを生命とする作家は、自分の身を抉るように徹底的に自己批判する必要があったのではないか。<sup>(68)</sup>

確かに、「後裔の街」に登場する高昌倫という人物は、植民地時代に抵抗できなかった苦悩するインテリである。しかし、ここまでみたように、金達寿はむしろ抵抗し得なかった「半日本人」を描くことに価値を置いていたのではないか。それは「軽々と過去を忘れ去ろう」とすることに対する告発として、植民地時代を生き抜いた多くの「自己」(=朝鮮人)の過去に立ち戻らざるを得ないという「自己批判」ゆえの判断であった。

金達寿が「自己批判」にこだわっていたことは、次のような事実からも窺える。「後裔の街」は1948年3月に朝鮮文藝社から単行本として出版され、その1年後には世界評論社から再出版された。このときに「後裔の街」は大幅に改稿されたのだが、在日朝鮮人文学を研究する河合修がすでに言及しているように、世界評論社版以降に今まで流布している「改稿された全8章」では、最後の「腹の中でこっと笑った」という一節が、「涙ぐみながら笑った」<sup>(69)</sup>に書き換えられている。解放後に文化人たちによる「第二の解放=自己批判」の問題がすでに提示されていたことを鑑みれば、上で紹介した松本の評価がそうであったように、「自己肯定の形象化」と捉えられてしまうような「高昌倫」に、その後金達寿が「自己批判」を内包した“涙”の姿勢を意識させたと読むことも可能である。

戦前期における消極的な朝鮮人大衆の葛藤を描いた作品は、他にも『民主朝鮮』に幾つも掲載されていた<sup>(70)</sup>。これらは、「朝鮮本国の文学創造が、“うばわれたものの奪還”から“奪還したものの変革、創造”の方向にいっせいにすすんでいる」そのとき、いっぽうの在日朝鮮人作家は“うばわれたものの奪還”のくるしいたたかいをあつかっている<sup>(71)</sup>と、当時新鋭文芸評論家として注目を浴びていた小原元(1919-75年)が鋭く指摘していたように、金達寿をはじめとする「在日」朝鮮文学の創造を担う文化人たちが、解放後もいまさらながら「第二の解放」に悩まされていたことを意味する。「うばわれたものの奪還」(=解放)のためには、逆説的にも植民地時代の消極的な「自己」を意識した上で、それを「自己批判」の契機として捉えてゆく過程が必要だったのである。

## 7. おわりに

本稿では、敗戦直後の日本において本格的に活動をはじめた在日朝鮮人作家・金達寿と、彼が中心となって創っていた雑誌『民主朝鮮』に注目し、1945年8月15日以降、金が「解放」をどのように構想していたのかについて考えてきた。

10歳頃に内地へ渡った金は、植民地時代に歪められた「民族」（半日本人性）としての自己像を認識・発見し、それを払拭するために、解放直後に雑誌『民主朝鮮』を創刊するに至った。彼にとって「解放」とは、決して政治的な祖国独立だけを意味するのではなく、内面的な課題であったと言える。雑誌『民主朝鮮』は日本人の朝鮮（人）に対する認識を正すために、日本語を用いて日本人に向かって発信する場として設けられたのだが、金はそのような場を通して日本人と新たな関係が結ばれることを希望していた。本稿で紹介した小説「後裔の街」が最初に単行本として出版されたとき、彼は「この作品を誰に読みたいかと訊かれれば、私は日本人に読んでもらいたい、特に朝鮮人以外の人々に読んでもらいたいと答えるだろう」<sup>(72)</sup>と「あとがき」に記している。

ところが、このような在日朝鮮人が日本語で「解放」を想像／創造するという営み自体、解放後という時空間において容易には受け入れられず、とくに日本語で書くことをめぐって在日朝鮮人文化人たちの間で葛藤が生じた。そのもっとも代表的な例が「文学用語論争」である。論争の渦中にいた金は、日本語による創作の「可能性」を求めて、朝鮮語による朝鮮文学の創造の必要性を力説する魚塘と対立していた。金は日本語による文学が畸形的な「朝鮮文学」としての可能性を持っていることを主張したのだが、それは文学そのものに対する可能性の問題を越えて、「日本語」に対する姿勢を問い直す内面的省察によって「解放」に近づけるという「可能性」の意味合いを持ち合わせていた。植民地経験という「呪われた運命」の下で習得された「日本語」にこだわることで、彼は解放後に軽々と「過去」を忘れ去ろうとする人々に対し警鐘を鳴らそうとしていたのである。

もちろん、日本語にこだわるということは、当時多くの若い在日朝鮮人が日本語を生活言語としていたこと、そして日本語創作によって戦後日本の民主主義文学との連携を図ろうとしていたことがその理由であったのは確かだが、しかしこれらに加えて「自己批判」を意識させるものとして「日本語」が用いられていたこともまた強調されるべきであろう。

実際に、文学用語論争が活発に行われた1947年頃から1948年にかけて、金達寿は『民主朝鮮』誌上において「第二の解放」をめぐり他の文化人たちと議論を交わしている。1945年8月15日の解放が「解放」ではないという認識から、「真の解放」（第二の解放）のために過去に立ち戻り、丁寧かつ徹底的に「自己批判」を行うことが求められていたのである。それはまた、この時期に出版される金達寿の小説「後裔の街」にも反映されていた。金は「後裔の街」の改稿の際に、抵抗できなかった「半日本人」の高昌倫に、「自己批判」の記号として「涙」を付与したのである。

このように、金にとって「解放」とは、日本人の認識を正して民族差別をなくすと同時に、朝鮮人自身が自己批判を繰返しながら過去を清算することを意味した。つまり日本人も、朝鮮人も、「自民族のなかにおけるファシズムを打ち倒すことこそが「解放」であった<sup>(73)</sup>。そしてこの課題が解決されれば、歪められた朝鮮人の民族像の払拭と、日本人との新たな関係が築かれるはずだった。

しかし、1949年9月には、戦後在日朝鮮人社会を支えて来た民族組織である朝連が解散させられる事件が起きた。そして1950年6月に勃発した朝鮮戦争によって雑誌『民主朝鮮』は終刊となる。このような状況を目の当たりにした金は、「解放」が遠ざかって行く「戦後」への失望感を込めて、日本人の朝鮮(人)に対する(差別)感情を「かんぜんに拭いとしてしまえなかった」<sup>(74)</sup>と落胆を込めて語った。

解放直後の日本における在日朝鮮人作家・金達寿が構想していた「解放」、そしてその意味を今われわれはどのように受け止めればいいのか。戦後70周年を迎えて、今一度そのことを吟味したいところである。

#### [注]

- (1) 本稿では朝鮮半島にルーツを持つ旧植民地者およびその子孫のことを「在日朝鮮人」と呼ぶことにする。
- (2) 朝鮮慶尚南道昌原郡(現馬山市)出身の小説家。詳しい経歴は本論において適宜説明していく。なお、注の人物説明は、主に国際高麗学会日本支部編集委員会編『在日コリアン辞典』(明石書店、2010年11月)を参照している。
- (3) 本稿では「戦後」(または「敗戦直後」と「解放後」という語を併用する。前者は「日本」という空間が意識される場合、後者は「朝鮮」あるいは朝鮮人の意識が反映される場合に分けて使用する。
- (4) 金達寿に関する研究は、崔孝先(1957年生)の『海峡に立つ人——金達寿の文学と生涯』(批評社、1998年12月)が作家論として、磯貝治良(1937年生)の『〈在日〉文学論』(新幹社、2004年4月)が在日朝鮮人文学の作品論として代表的と言えるが、いずれも金達寿の「解放」をめぐる意識についてはあまりふれていないし、『民主朝鮮』については紹介にとどまっている。
- (5) 金達寿『わが文学と生活』青丘文化社、1998年5月、125頁。
- (6) 『民主朝鮮』は、創刊号はほとんど金達寿と元容徳(後注15参照)の合作であった。元容徳はほかに「金哲」、「林勲」を、金達寿は「孫仁章」、「朴永泰」、「金文洙」、「白仁」をそれぞれペンネームとして用いて活動をしていた。その後次第に執筆者も増え、当時の日本人文学者および左翼的知識人の投稿も増えていく。『民主朝鮮』の紙面構成をみると、文学関係(56%)、政治・経済関係論文、記事、日本人との座談会の順になっていた。詳しい書誌情報は、朴鐘鳴(パクチョンミョン)『民主朝鮮』概観『復刻『民主朝鮮』——GHQ時代の在日朝鮮人誌(別巻)』(明石書店、1993年5

- 月), 長沼節夫「祖国分割占領の苦渋を秘めて——『民主朝鮮』(『思想の科学』第6次通号98, 特集: 雑誌にみる戦後の初心, 1978年11月, 74-80頁), 高柳俊男『『民主朝鮮』から『新しい朝鮮』まで』(『季刊三千里』第48号, 1986年11月, 105-15頁)などを参照されたい。
- (7) 金達寿『わがアリランの歌』中央公論社, 1977年6月, 169-70頁。
- (8) この点について, 金は次のように回想している。「私はプロレタリア文学運動といわれるものが過去にあったらしいということはばくぜんとして知っていたが, それがどんなものであったかはまったく知らなかった。(中略) ナップ, カップ(朝鮮プロレタリア文学芸術同盟)というようなことばを知ったのも, それはすべてこの戦後になってからである」(金達寿「事実を事実として——新日本文学会員の十年」『新日本文学』第12巻7号, 1957年7月, 154頁)。
- (9) 崔孝先『海峡に立つ人』14頁。
- (10) 金達寿『わが文学と生活』83頁。
- (11) 同上, 83頁。
- (12) 金達寿『わがアリランの歌』197頁。金史良は戦前期において日本語で作品を発表していた, 言わば戦前期における在日朝鮮人文学者の先駆的存在である。1939年10月に『文藝首都』第7巻10号に掲載した小説「光の中に」が芥川賞候補となるが, 1950年, 朝鮮戦争の時に従軍して戦死したとされている。金達寿は「金史良は短いその生涯をつうじて, 私に大きな影響を残した」と記している。金史良の「戦死」が日本に伝わると, 『新日本文学』第7巻12号(1952年12月)は「金史良追悼」特集を組み, そのなかで金達寿は「戦死した金史良」(48-55頁)という一文を書いている。
- (13) 『金史良全集』IV, 河出書房, 1973年4月, 114頁。
- (14) 敗戦直後にできた在日朝鮮人下からの多様な発意を束ねるための自治組織は, 1945年10月15, 16日の両日にかけて開催された在日本朝鮮人連盟中央総本部の結成大会において, 在日本朝鮮人連盟(朝連)として発足した。朝連は当時の在日朝鮮人社会では大きな影響力を有していたが, 1949年9月8日, 日本政府の団体等規正令に基づいて解散された。
- (15) 元容徳は金達寿より4, 5歳上であり, 立教大学の経済学部を卒業した。1945年10月10日, マッカーサーの政治・思想犯釈放指令によって出獄し, 当時は神奈川県本部の外務担当常任(外務部長)を務めていた。金達寿は「情報部長」を務めていた。金達寿『わが文学と生活』138頁。
- (16) 同上, 140頁。
- (17) 戦時中に李殷直イワンジク, 金聖珉キムソンミン, 張斗植チャンドウシク(1916-77年)と一緒に出していた『鷄林』という回覧形式の同人雑誌が『民主朝鮮』の前身である。金達寿「雑誌『民主朝鮮』のころ」『季刊三千里』第48号, 1986年11月, 99頁。
- (18) 金達寿はその理由について, 「(朝鮮人)をぐっと前面に」出して「(朝鮮)というものを回復するという意識がずっとあった」と答えている。金達寿「雑誌『民主朝鮮』のころ」100頁。
- (19) 静岡県の伊東(現在伊東市)にある小さい印刷所だったという。金元基は, 当時東京・目黒の祐天寺で小さな新聞販売店をやっていた。金達寿『わが文学と生活』141頁。
- (20) 慶尚北道慶山出身。1927年7月, 20歳のときに日本へ渡る。解放後の朝連では神奈川県本部委員長, 中央本部議長などを務めたが, 朝連が団体等規正令によって解散処分を受けた際に, 他の幹部らとともに公職追放の措置を受けた。後の在日本朝鮮人総連合会の結成時(1955年)には



6人からなる議長団の一人であった。

- (21) 『民主朝鮮』は、1947年5月の第10号で雑誌名が『文化朝鮮』に変わったが、その後すぐ『民主朝鮮』に戻った。その理由については「いろいろと混乱があった」としか語っていない。金達寿は「私としては、『民主朝鮮』というのはどこか政治的な感じが強くて、ちょっとためらわれる気持ちがなくもなかった。しかし雑誌をつづけるには、「朝連」の協力と援助とが必要だったので、私もすぐそうすることに同意したのだった」と述べている。金達寿『わが文学と生活』142頁。
- (22) 小林聡明「在日朝鮮人メディア研究序説——GHQ占領下における在日朝鮮人新聞の成立と変容」『マス・コミュニケーション研究』第61号、2002年7月、146-61頁。
- (23) 元容徳「創刊の辞」『民主朝鮮』創刊号、1946年4月、頁番号なし。『民主朝鮮』の引用に際して、旧漢字を新漢字に、旧仮名遣いを新仮名遣いに改めた。以下同様。
- (24) 李殷直は朝鮮・全羅北道生まれ。1933年渡日、日本大学法文学部芸術科卒。通信社での新聞記者などを経て、1960年より財団法人朝鮮奨学会理事を務める。また神奈川大学で講師を務めた。
- (25) 李殷直「六十万人以上について——在日朝鮮人問題・文化的な立場から」『民主朝鮮』第17号、1948年1月、8頁。
- (26) 在日朝鮮人史研究の先駆者である朴慶植<sup>パクキョング</sup>（1922-98年）は、「1946年ごろからだされた金達寿編集の月刊誌『民主朝鮮』を熱心に読んだ」と回想している。朴慶植『在日朝鮮人——私の青春』三一書房、1981年6月、93頁。
- (27) 金達寿は『民主朝鮮』第8号（1947年2月）の「編集室から」で、原稿も集まったが「紙がない」と嘆きながら、「たとえほかの雑誌がみんなつぶれてしまっても、われわれは出さなければならぬ。何よりもわれわれは日本の読者とその支持を裏切ることにはできない」と述べている。
- (28) 日本のジャーナリスト・経済学者。元日本共産党参議院議員。
- (29) 金達寿「雑誌『民主朝鮮』のころ」101頁。『民主朝鮮』の発行部数は初めのころ、1万5,000部印刷していたのがほぼ全部売れていたという。
- (30) 朴鐘鳴『民主朝鮮』概観』『復刻『民主朝鮮』——GHQ時代の在日朝鮮人誌 [別巻]』9頁。座談会を含む延べ人数でみたとき、在日朝鮮人が216人（53%）、本国の朝鮮人（解放後に結成された朝鮮文学者同盟所属の24名の作家が中心）が75人（18%）、日本人が103人（25%）、中国人が14人、ロシア人が1人である。
- (31) キム「編輯室から」『民主朝鮮』第6号、1946年12月、頁番号なし。
- (32) 「編集後記」『民主朝鮮』創刊号、1946年4月、頁番号なし。
- (33) 日本人の認識を正すという点で言えば、神奈川県に住む大川三重という日本人女性は『民主朝鮮』を読んで「(前略)軍国主義的、国粹主義的な教育を受けた私は、まだまだ自分の気づかぬところにそのような思想が、ひそんでいたりするのではないかと、反省したりしています。今後、“民主朝鮮”のような、よい雑誌を沢山読んで朝鮮について学ぶと同時に、自己のなかに潜在する、悪い思想の一扫を計りたいと思います」とその感想を寄せている。大川三重「読者だより」『民主朝鮮』第4号、1946年7月、78頁。
- (34) 朝鮮・在日朝鮮人史家の樋口雄一（1940年生）によれば、解放の時点では少なくとも20万人前後の在日朝鮮人が日本の学校で就学していたことから、日本語を生活言語とする若い人が多か

ったと考えられる。樋口雄一「在日朝鮮人にとっての解放と日本人の敗戦と」『李論 21』第 12 号, 2011 年春, 37 頁。また、『民主朝鮮』の主筆の一人である李殷直は、解放後に「我等は、自分たちの思考の表現を、日本語で続けねばならず、新聞や雑誌を出すにしても、日本語でせねばならなかった」と述べている。李殷直「六十万人について——在日朝鮮人問題・文化的な立場から」9 頁。

- (35) 京畿道出身。京城普通商業学校卒業、その後渡日。法政大学卒業、人文地理を専攻。解放後『民衆新聞』、『解放新聞』の編集員、朝連教科書編集委員、朝連東京本部文化部次長、1949 年から 1956 年まで東京朝鮮中学校教員。その後朝鮮大学校教員、時代社副社長などを歴任。
- (36) 河合修「敗戦（解放）直後の在日朝鮮人文学」『法政大学大学院紀要』No. 58, 2007 年 3 月, 125-42 頁。高柳俊男『『朝鮮文藝』にみる戦後在日朝鮮人文学の立立』、川村湊編『戦後』という制度——戦後社会の「起源」を求めて』文学を読みかえる⑤、インパクト出版会、2002 年 3 月, 56-66 頁。
- (37) 小沢有作『在日朝鮮人教育論 歴史編』亜紀書房、1973 年 12 月, 179 頁。
- (38) 河合修「敗戦（解放）直後の在日朝鮮人文学」140 頁。
- (39) 『在日朝鮮文化年鑑』朝鮮文藝社、1949 年 4 月, 69 頁（朝鮮語）。最初の「文学用語論争」は『朝鮮新報』紙上で行われた。
- (40) キム「編集部から」『民主朝鮮』第 13 号, 1947 年 8 月, 頁番号なし。『朝鮮文藝』は、1947 年 10 月 1 日に朝鮮文藝社から創刊号が出された（編輯・発行人＝朴文三<sup>パクムンサム</sup>）。計 6 冊が確認されており、『朝鮮文藝』での執筆は『民主朝鮮』で活躍していた文化人たちが中心であった。『朝鮮文藝』については高柳俊男『『朝鮮文藝』にみる戦後在日朝鮮人文学の立立』がその書誌情報を詳しく整理している。
- (41) 魚塘「日本語による朝鮮文学に就て」『朝鮮文藝』第 2 巻第 2 号, 1948 年 4 月, 10-11 頁。
- (42) 金達寿「一つの可能性」『朝鮮文藝』第 2 巻第 2 号, 1948 年 4 月, 13-15 頁。
- (43) 河合修「敗戦（解放）直後の在日朝鮮人文学」139 頁。
- (44) キム「編集部から」『民主朝鮮』第 11 号, 1947 年 6 月, 頁番号なし。
- (45) 岩上や伊藤は、「道具主義」的に言語を捉えていた。朝鮮人が日本語で書くという行為が肯定的に捉えられていたのも、このような理由からだと言える。岩上は、「(外国語で自分の作品を書くことが＝引用者注) 多くの朝鮮作家にとってはむしろ平凡事と見られる程であった。朝鮮作家は日本語を日本人以上の巧みさと正しさで駆使している。(中略) 私たちは朝鮮作家のこの勉強と努力とその成果とに敬意をささげずにはいられぬ」(岩上順一「朝鮮作家について」『民主朝鮮』第 5 号, 1946 年 8・9 月, 72 頁) と述べている。そして伊藤は、「言葉の習慣が、民族に本質的なものかどうかということも大変疑わしい」と述べながら、言葉が便利なものとして使われ始めると、それが言葉の一部となり遂に考え方を形作って行くと説明している(伊藤整「民族の言葉と文学」『民主朝鮮』第 15 号, 1947 年 10 月, 38-39 頁) ところからも、彼らが言葉を選択可能な「道具」として捉えていたことがわかる。
- (46) キム「編集部から」『民主朝鮮』第 11 号, 1947 年 6 月, 頁番号なし。
- (47) キム「編集部から」『民主朝鮮』第 14 号, 1947 年 9 月, 頁番号なし。
- (48) 当時、金達寿の意見はそれほど支持されていなかったと思われる。支持されるとしても、あく

までも「過渡期」だから存在するもの、つまりいずれは「捨てる」ものと限定されていた。たとえば、当時朝連の中央本部議長をつとめていた韓徳銖が『民主朝鮮』刊行の意義を述べた次の文章にもそれがよく現れている。「『民主朝鮮』の意義は＝引用者注 朝鮮の過去と現在・将来を日本の一般に向かって照らし出すことを大目的とし、一方にまた、日帝の一方的な同化教育政策によって自己の祖国の文化・言語に対して盲目にされた在日のわが世代たちに対する過渡的な手段としての、日本語をもってその眼を切り開くということであった」。韓徳銖「創刊二周年に際して」『民主朝鮮』第19号、1948年4月、頁番号なし。

- (49) 張赫宙は「基本的に日本語と朝鮮語とのバイリンガルで、(中略)言語は文学創作のための道具としての役割を果たすもの」であった。川村湊「在日朝鮮人文学とは何か」『季刊青丘』第19号、1994年2月、28頁。
- (50) たとえば、朝鮮半島で活動していた林和(イムフフ、1908-53年)は、「民主主義的改革、近代国家の建設だけで、漢文と国文あるいは漢文文学と母語文学の不自然な位置をなおせるだろうか。これをなおすことによって、朝鮮民族ははじめて自己の正しい民族文学を建設しようのである」と述べながら、朝鮮語使用を民主主義的改革の前提として位置づけていた。林和「朝鮮民族文学の基本課題」『民主朝鮮』第16号、1947年12月、4頁。
- (51) 金達寿「傷跡の追求」『民主朝鮮』第15号、1947年10月、37頁。
- (52) 「われらの放談」『民主朝鮮』第19号、1948年4月、12-24頁。座談会には、金達寿をはじめ『民主朝鮮』の主要メンバーである李殷直、張斗植、元容徳、金元基、許南麒(1918-88)、朴元俊(1917-72)の計7人が参加している。
- (53) 朴元俊は作家。同志社大学卒、三一書房の設立と運営に関わる。朝連東京都府本部結成に参画、府本部青年部長金元均らと『大衆新聞』発刊。1948年解放新聞社勤務のために上京。朝連解放後に解放新聞社編集局長、神奈川県朝連中高級学校校長などを歴任。
- (54) 朴元俊「金嬢のこと」『民主朝鮮』第18号、1948年2月、42-55頁。
- (55) 許南麒は朝鮮・慶尚南道生まれ。釜山第二商業学校卒業、治安維持法違反で収監されてのち21歳のとき渡日。日本大学芸術学部映画科、中央大学法学部卒。
- (56) 前掲、座談会「われらの放談」14-15頁。
- (57) 同上、13頁。
- (58) たとえば、林浩治『戦後非日文学論』(新幹社、1997年11月)を挙げることができよう。
- (59) 金達寿は新しい時代の「在日」朝鮮文学について「ひとたびこの陣痛の苦悶のおわるときにはそのはげしさに比例して「新しいよそおい」ははげしく、うつくしくけんらんたるものとなるであろう。それはすでに、陣痛のなかにおいて芽生えている。それは朝鮮の文学だ！」(キム「編集室から(特集について)」『民主朝鮮』第8号、1947年2月、頁番号なし)と記している。
- (60) 幼少時に渡日し、そのまま日本で教育を受けて大学を卒業した朝鮮人の高昌倫(金達寿＝引用者注)が、従妹からの手紙を期に朝鮮半島に帰り、やがて民族主義に目覚めていく過程を描いた長篇小説。もともと雑誌『鷄林』に第2章まで発表したものを、戦後書き継いで、『民主朝鮮』第1号(1946年4月)から第10号(1947年5月)まで金達寿の名前で連載(全10回)した。
- (61) 1946年2月21日に結成された文化・芸術・学術団体の連合組織。1948年までには、新日本文学会、民主主義科学者協会、自由法曹団、民主主義教育研究会などの22団体が傘下団体となっ

ていたが、1950年以降、活動を停止した。金達寿は「同文連（日本民主主義文化連盟＝引用者注）とわれわれとの関係は深い」と述べている。タルス「編集部雑記」『民主朝鮮』第20号、1948年5月、「頁番号なし」。

- (62) 文芸評論家。青山学院大卒。平凡社に勤め、戦後は日本民主主義文化連盟事務局長、日本ジャーナリスト会議副議長などを歴任。
- (63) 金達寿「後裔の街（終回）」『文化朝鮮』第10号、1947年5月、74頁。
- (64) 松本正雄「暗い追憶」『民主朝鮮』第20号、1948年5月、41頁。
- (65) 金達寿「あとがき」『後裔の街』東風社、1966年4月、312頁。
- (66) 座談会「われらの放談」では、李殷直が「大部分の日本に来ている我々というものは（中略）血を流していないんだ。べんべんだらりと卑屈に生きて来た。実際に闘争して自分で血を流した人はそういう軽々しいことはない。血を以てやった人は飛躍がないし矛盾がない」と述べており、金達寿はこの自己批判、あるいは自己清算の問題を「深刻な問題」として強調している（前掲、座談会「われらの放談」15頁）。
- (67) 当時、「人民のための民族文学」がうたわれていた。たとえば同時期に『民主朝鮮』にもたびたび登場する小説家・鹿地亘（1903-82年）は、「社会的背景なくして文学は論じられぬ。一体だれのために、だれにむかって文学が書かれているかというところから反省をおこすことが要件であろう」と述べている。鹿地亘「東洋の相貌」『文化朝鮮』第10号、1947年5月、4頁。
- (68) 徐龍哲「在日朝鮮人文学の始動——金達寿と許南麒を中心に」『復刻『民主朝鮮』——GHQ時代の在日朝鮮人誌（別巻）』53頁。
- (69) 傍点引用者。「後裔の街」は解放前に書かれた第2章までと、解放後に書き継がれた第3章以降、そして世界評論社版（1949年5月）以降流布している改稿された全8章という異なる3つのテキストが存在する。河合修「敗戦（解放）直後の在日朝鮮人文学」133頁。
- (70) たとえば、張斗植「帰郷」『民主朝鮮』第15-16号、1947年10-12月、40-52頁、48-64頁）、李殷直「脱走兵——同志Hのために」『民主朝鮮』第14号、1947年9月、31-40頁）などの「新聞記者」、「脱走兵」がそうであろう。
- (71) 小原元「“うしなわれたもの”の恢復」『民主朝鮮』第31号、1949年9月、62頁。
- (72) 金達寿「あとがき」『後裔の街』朝鮮文藝社、1948年3月、236頁。
- (73) 朴永泰（巻頭言）「民族の責任」『民主朝鮮』第22号、1948年9月、頁番号なし。朴永泰は金達寿のペンネーム。
- (74) 金達寿「在日朝鮮人の運命」『世界評論』第4巻12号、1949年12月、75頁。また、金達寿は朝連が解散されたときのことを「一九四九年九月八日の記録」『民主朝鮮』第32号、1950年5月、79-88頁）に書いている。